

人文主義と教育

— 西ローマ帝国終焉とヨーロッパへの自由学芸継承 —

海 津 淳

キーワード：人文主義、教育、自由学芸、カッシオドルス、カロリング・ルネサンス

序

西暦 476 年、ゲルマン人傭兵隊長オドアケル Odoacer (434 頃 -493) が幼帝ロムルス・アウグストゥルスを廃位し、西ローマ帝国は滅亡する。古代世界の終焉の後、その領内ではゲルマン人国家の興亡が繰り返され、「暗黒の」との形容を冠せられる中世が幕を開ける。その後「ヨーロッパ」なる世界の確立にはさらなる時を要するが、しかしローマに集約された古典古代の遺産は、間違いなくこの「ヨーロッパ」へと継承されてゆくことになる。

学問および教育の領域も例外ではない。古代ギリシア起源の自由学芸 *artes liberales* は西ローマの滅亡に際しつつも潰え去ることなくヨーロッパに継承され、そこで大学 *universitas* に代表されるように、あらゆる学問の礎としての確固たる地位を保持し続けた。

本稿では、西ローマ帝国滅亡以降、自由学芸すなわち後に人文主義的教育とも称される学問・教育領域がいかにして継承され保持されたのか、ヨーロッパの形成期の情勢を中心に検証する。

1. 西ローマ帝国とゲルマン人諸国家

1) 西ローマ帝国の崩壊

「ローマ帝国の滅亡」というテーマは従来多くの碩学によって論じられてきた重要な主題である。ここではそうした論議に立ち入ることはできないが、少なくともその概略を振り返る必要はあろう。

紀元前の共和制を経て、ローマはカエサルの養子オクタウィアヌス Gaius Julius Caesar Octavianus / Augustus (位前 27- 後 14) を初代皇帝とした帝政に移行する。皇帝は自らを「プリンケプス」 *princeps* すなわちローマ市民の「第一人者」と位置付けてあくまで共和制尊重の姿勢を示しつつ、実質的な元首政が敷かれ、そうした中でローマ

は未曾有の大帝国へと発展してゆく。五賢帝に象徴される安定と拡大、繁栄において *pax romana* —ローマの平和—が享受された。

しかしその後、歴史的に3世紀の危機と呼ばれる軍人皇帝乱立の時代よりローマの国力は低下を始め、その混乱を收拾したディオクレティアヌス Gaius Aurelius Valerius Diocletianus (位 284-305) はこの巨大な帝国を治めるために四分統治をおこなった。さらにコンスタンティヌス帝 Flavius Valerius Constantinus (位 306-377) が再び帝国を統一し数々の改革を推し進めるが、395年のテオドシウス帝 Teodosius I (位 379-395) の死後国家は東西に分裂し、西のローマは約100年の後、476年に滅亡した。

2) ゲルマン人諸国家の興亡

西ローマ帝国の崩壊に関しては先に述べたように多くの学説が存在するが、ゲルマン人の影響は紛れもない最大の要因であろう。

ゲルマン人は、既に古くは1世紀の歴史家タキトゥス Publius Cornelius Tacitus (55頃-120頃) の『ゲルマニア』¹ にその姿を現し、以来しばしばローマ国境を脅かしたが、4世紀、帝国末期に至っては375年のフン族の移動に押し出されるように大移動を開始し、東・西ゴート族、ランゴバルト族などゲルマン諸部族が次々とローマ領内に進出する。410年にローマ市を略奪した西ゴート族は、418年には帝国領であったガリア南部からイベリア半島にかけて王国を建て、アングロ・サクソン人は同様にブリタニアに進出(449年)、ランゴバルトはイタリア北部に(568-774)、ヴァンダル族は地中海南岸すなわち北アフリカに(429-533) 王国を樹立した²。

しかし最終的にフランク族のカル大帝の時代まで、いずれの王国もローマに代わる決定的な支配力を持つに至らず、東ローマ帝国の圧力も加わって、476年以降、ゲルマン人諸国家の興亡の時代が続くのである。

2. イタリア王国(東ゴート王国)とローマの知的遺産継承

1) イタリア王国(東ゴート王国)

東ゴート族によるイタリア王国も、そうしたゲルマン人国家のひとつである。王テオドリック Theodoric (位 471-526頃) は、ドナウ河流域からローマに進出、オドアケルを倒した後ラヴェンナを首都とする王国を建設した。彼は周辺のゲルマン人国家とあるいは連携を深めあるいは討伐し、かつローマの権威を直接に継承する東ローマ帝国にその王位を承認させつつ、西ローマ帝国の後継者としてのイタリア支配をもくろんだ。

結局彼の死後王国は安定を喪失し、555年に東ローマ帝国によって滅ぼされることになるのであるが、その政策の特徴のひとつは元老院階級をはじめとしたローマ人の重用であった³。ローマ帝国の衰退と西の帝国滅亡の直接的要因と目されるゲルマン人であるが、ことに東ゴート王テオドリックはローマの政治機構や文化を尊重しこそすれ、破壊の対象

とすることはなかった。これがのちのヨーロッパにおいて大きく作用し、特に本稿が主題とする教育・学問の分野で重要な役割を果たしたのである⁴。

2) ボエティウスとカッシオドルス

古代末期から中世初期の社会的混乱の時代、古典古代の学問をヨーロッパに伝えた業績により名を残すボエティウス Anicius Manlius Severinus Boethius (480 頃 -524 頃) は、「自由学芸」七科に関する規定でも知られている。彼は東ゴート王テオドリック支配下のイタリアでローマ名門の家系に生まれた人物であり⁵、その統治においてローマ人を重用したテオドリック王のもとでコンスル（執政官）の重責を勤めた。言わば古代と中世、ローマとゲルマンの架橋ともいえる人であったが、不安定な政情の中、東ローマ帝国に関わる嫌疑をかけられ投獄、刑死する。

しかし獄中にて著わされた『哲学の慰め』De consolatione philosophiae を初め、『音楽教程』De institutione musica、『数学教程』De institutione arithmetica など自由学芸に関する著作や、アリストテレスの『カテゴリー論』翻訳 Liber Aristotelis De decem praedicamentis, および注解 In Categorias Aristotelis、『命題論』翻訳 Liber Periermenias Aristotelis, および注解 Commentarii in librum Aristotelis、『分析論前書』翻訳 Priora analytica Aristotelis、『詭弁論駁論』翻訳 De sophisticis elenchis などを残した⁶。これによって、帝国滅亡後の混乱した時代にも拘わらず、彼は古典古代の学問・思想をヨーロッパ世界に伝えることに看過すべからざる貢献をしたのである。

他方、南イタリアのスキュラケウムに生まれたカッシオドルス Flavius Magnus Auerlus Cassiodorus Senator (485 頃 -580 頃) は、その名が示す通りボエティウス同様ローマ貴族の出身であった。父はオドアケルと東ゴート王テオドリックに仕え、カッシオドルス自身もテオドリック王とその後継者たちのもとで財務官、執政官など要職を務めた。

しかし彼において一層注目されるべきは、引退後故郷にウィウアリウム（Vivarium、養魚池の意）修道院を創設し、図書の収集、学問研究と教育に尽力した点にある。彼は精力的にローマなどに足を運んで社会的混乱の中で散逸の危機にあった貴重な書籍を収集し、ウィウアリウムに保管する。そしてここで彼は聖書研究・神学教育を第一義的目的としながらも、古典古代の自由学芸を上述の学問・教育に必要不可欠な領域と位置付け、これを継承し研究と教育を行ったのである。

彼の代表的著作として、『（聖書並びに世俗的諸学研究）要綱』Institutiones; Institutiones divinarum et humanarum lectionum; Institutiones divinarum et saecularium litterarum、『詩篇講解』Expositio Psalmorum、など神学および自由学芸に関する著作、『東ゴート王国史』Historia Gotica、『年代記』Cronica 等歴史関係の著作の他『雑纂』Variae などが残されているが、次章でその『（聖書並びに世俗的諸学研究）要綱』の内容に触れつつ、彼がこの時代に、さらには後世のために果たした役割を考察する⁷。

3. カッシオドルスによる自由学芸観

1) カッシオドルス『要綱』

カッシオドルスの著作『(聖書並びに世俗的諸学研究) 要綱』⁸ (以降『要綱』と表記) は、彼の代表的業績であるばかりでなく、古典古代の自由学芸の継承・伝達という観点、ひいてはそれが後のヨーロッパの教育過程形成に及ぼした影響の大きさからも見過ごすことのできない著作である。その題名が示す通り、ここでは修道院における主たる研究・教育の主題「第1巻：聖書研究の方法」と、その予備知識としての「自由七科」すなわち古典古代より継承された「自由学芸」についての「第2巻：自由学芸（自由七科）及びその研究法」というように二つの領域の研究方法が展開されている。

その序文には以下のようにある。

「(1) 学校が世俗の学問への大いなる欲求で熱気を帯び、人々の多くが学校を通して世界についての知識に到達できると信じているのを知り、また世俗の作家たちについては豊富にしかも見事に教えられているのを見るにつけ、私は聖書の公的な教師が欠けていることに深い悲しみを覚えた。

私はローマの司教、幸いなるアガペトゥスとともに、アレクサンドレイアにおいて長い間その習慣が伝えられてきたように、そして今でもシリア人の町ニシビスでヘブライ人たちが熱心に展開していると言われるように、ローマの都において、人々が世俗の学校の職業教師よりもむしろキリスト教の教師を金を払って集め、受け入れるよう努めている。それによって魂が永遠の救いを得、信じる者たちの口が正しく清らかな言葉で飾られるだろう。しかしイタリア王国における激しい戦乱と戦闘によるひどい混乱によって、私の願いは全く満たされなくなってしまった。そのために私は神の愛によって、教師の代わりに主の導きの下で、あなたがたにこの入門的な書物を作り上げることへと駆り立てられた。本書を通して、聖書の一連のつながりと世俗の学問に関する簡略な知識が神の恵みによって語られるだろう。⁹」

ひき続き彼は聖書を学ぶ意義、方法について語っているが、続いては自由学芸の必要性が次のように述べられてゆく。

「(6) 自由学芸に関する第2巻においては、むろんいくつかのことが選び出されなければならない。だがそこでは、誤りを犯したとしても、それが信仰の堅固さを揺るがすことがないなら、あまり大きな危険はないだろう。さらに聖書の内容に見出される自由学芸に関する事柄は何であれ、前もって得る知識によってより良く理解されることは明らかである。というのも、霊的な知識の始源においてはそうした事柄に関する証がいわば種子のように播かれており、それらを後に世俗の学問の教師たちが極めて思慮深く彼らの規則に移し換えたことが認められるからである。¹⁰」

以上の引用からも明らかなように、カッシオドルスは自らの後半生を修道生活・神学研

究へと転ずるに至って、神学すなわち聖書研究の必要性を痛感してこれを研究・教育するためウィウアリウム修道院を建設した。ここでは勿論聖書研究が第一義的目的ではあるが、これをよりよく理解するための自由学芸を学ぶ必要性を説いているのである。無論、古典古代の「異教」の学問を危険視し頑なに拒んだ神学者も少なくなかった。教皇グレゴリウス Gregolius I（位 590-604）の「ゼウス賛美とキリスト賛美を同じ舌でなすことはできません。敬虔な在俗信徒にさえふさわしからぬことを、こともあろうに司教の身でたえらるとは、まことに恥ずべき冒瀆的なことではありますまいか」との言葉はそうした立場の象徴といえよう¹¹。しかしこの点に関してもカッシオドルスはむしろ当然のごとく、内容を「選択」することによって問題は消化され、たとえその過程において過誤があろうとも信仰の土台に関わらない限り「あまり大きな危険はないだろう」と易々と乗り越えている。

2) カッシオドルス『綱要』第2巻

一般に古典古代起源の「自由学芸」あるいは「自由七科」は、「文法学」「修辞学」「論理学」「数学」「音楽」「幾何学」「天文学」によって構成されている¹²。古代末期よりヨーロッパ中世に向けてこの「自由学芸」を伝える重要な一翼を担ったカッシオドルスが、これらをどのように捉えているのかを『綱要』第2巻に検証することは、「大学」universitasに至るヨーロッパの基礎教育観の原点に関する考察としても意義ある試みであろう。再びその本文から引用するものが、以下である。

「…本書において、われわれはまず最初に文法学について語らなければならない。文法学は、言うまでもなく自由学芸（liberals litterae）の端緒であり基礎である。ところで書物（liber）という語は、〈自由〉（liber）という語に由来する。それは、木から剥ぎ取られた（liberato）樹皮のことである。パピルスが発見される以前に古人は神託をこの樹皮に書き写していた。樹皮が細かい枝を包んでいることもあり、巨大な太い木々を取り巻いていることもあるように、事柄の性質に合わせて書乙の様式を定めることができるので、短い書物を作ることでも大部の書物を作ることでも自由である。さらにわれわれはウァロが述べているように、あらゆる技術は何らかの有用性ゆえに存在するようになったということを知らなければならない。技術（ars）は、その規則によってわれわれを制約し（artet）、拘束するので技術と言われる。別の人が言うには、この言葉は apo tes aretes つまり「卓越性ゆえに」という意味のギリシア語から引き出されたもので、雄弁な人々はそれをあらゆる事柄についての地と呼んでいる。

第2に修辞学について語らなければならない。修辞学は、雄弁の輝かしさと豊さのゆえに、とりわけ政治上の論題において必要とされ、尊重される。

第3に、論理学について語らなければならない。これは一般に弁証論（dialectica）と言われている。世俗の教師たちの言うところでは、この学科は非常に精妙で簡潔な議論によって偽から真を区別する。

第4に数学的諸学科について語らなければならない。これには算術、幾何学、音楽、

天文学の4つの学科が含まれている。われわれは、数学的諸学科をラテン語で理論的学 (doctorinales) と呼ぶこともできる。この名称によって、それらが教えるすべての理論的な知 (doctorinalia) を示すことができるが、数学的諸学科は、その卓越性ゆえにこの共通に用いられる (理論的学という) 言葉がそれ自体に固有に用いられることを要求した。それはちょうど、それぞれの言語において多くの詩人や雄弁家が知られているのに、「詩人」と言われれば、ギリシア人はホメロスを、ラテン人はウェルギリウスを思い描き、また「雄弁家」と言えば、ギリシア人はデモステネスの名を、ラテン人はキケロの名を挙げるようなものである。ともかく数学は抽象的な量を考察する学問である。抽象的な量と言われるのは、われわれがそれを質量や他の附带的物質から知性によって分離し、論理的思考によってのみ扱うからである。¹³⁾

このような諸学の紹介の後、さらにそれぞれの学科についてのより詳細な解説が続くのであるが、カッシオドルスはここで自由学芸全七科を列挙し、例えば聖書という宗教的領域の学問であろうと、論理的に思考しそれによって真と偽を判断するために古典的教養である上記七科が不可欠であると位置づけたのであった。

周知のとおり、ヨーロッパ世界の形成と確立の過程において、ローマ帝国時代既に国教化していたキリスト教組織が、無力化したあるいは未確立の国家機構に代わって行政的・社会的に大きな役割を果たした¹⁴⁾。そしてその後近代までの長きにわたって文化・学問のみならず社会的・政治的に多大な影響を及ぼし続けてゆく。

それは教育の領域においても例外ではない。古代末期一すなわち西ローマ帝国の崩壊一から中世初期の混乱の時代において、唯一の高度な教育機関は修道院付属学校であった。次に社会の安定につれて都市が発展すると、それは都市部の司教座聖堂付属学校へと移行し、さらに大学 universitas の形成に至る¹⁵⁾。しかしそこでは常に神学の優位、多くは聖職者による教授という図式が堅持されてゆくのであるが、そうしたキリスト教の圧倒的優位の時代においても古典古代からの自由学芸が継承・伝達されてゆく過程を見るにつけ、このカッシオドルスに代表されるローマの知識人の見識と貢献の重要性が再確認できよう。彼らのこうした努力によって、古代ギリシア・ローマの知的遺産が散逸を免れ後世に伝えられ、殊にルネサンス期人文主義において再び注目を集め再興されることが可能となったのである。

4. カロリング・ルネサンス

1) カール大帝の文教政策

中世初期、カッシオドルスと同様の業績を残した人物に、西ゴート王国で生涯を送ったセビリャのイシドルス Isidorus episcopus Hispalensis (560頃-636)¹⁶⁾がおり、『命題集』

Sententiae、『語源』Etymologiae など、中世の教育・学問に大きな影響を及ぼす著作を残しているが、彼に関しては別の機会に譲ることとし、ここではカッシオドルスの時代との比較の意味でカロリング朝の例を概観したい。

中世初期の混乱の時代を経て、周辺のゲルマン諸国を平定し一応のヨーロッパ統一を果たしたのはフランク王国のカルル大帝（シャルルマーニュ）Carolus Magnus（位 768-814）であった。フランク王国を現在の仏・独・伊に相当する地域を含む国家に発展させ、800 年には教皇レオ 3 世より西ローマ皇帝として戴冠し、「神の代理人」によって「ローマ帝国の後継者」の座を認められた人物である。

「カロリング・ルネサンス」の語が示す通りその時代には活発な文芸活動が展開し、殊にアルクイヌス（アルクイン）Alcuinus（730 頃 -804）、ベダ・ヴェネラビリス Beda Venerabilis（673/674-735）らイギリスの修道院出身者が活躍したが、その主導者は紛れもないカルル自身であった¹⁷。

彼は文化面では十分な教養を持つ官吏と聖職者を養成するため、司教区、修道院に学校創設を命じ、アルクイヌスらを招聘したのである。そうした彼の希求を、「一般布告」Admonitio generalis やフルダの修道院長と修道士たちに宛てた書簡に検証することができる。

「司祭たちは彼らのもとへ、奴隷の境遇にある子供たちのみでなく自由民の子供たちも集めるように。我々は読むことを学ぶための学校を創設することを望む。すべての修道院と司教館で、詩篇、音符、歌唱、教会歴算出法、文法を教え、神学書を注意深く校正するように。なぜならば正しく神に祈ることを欲しながらも、しばしば書籍の誤りや不完全さのゆえにそこに至ることのできない者がいるからである。あなた方の生徒が、本を読むことによってあるいは書くことによってその意味から逸脱しないようにしなさい。しかし、福音書、詩篇、ミサ典書を書写する必要がある場合、それは十分成熟した人間が非常に注意を払って行うべきである。¹⁸」

「…あなた方の献身は神に嘉せられたものであるだけに、われらは、われらが信者たちとともに、次のことが有益だと考えたことを知ってもらいたい。すなわちキリストの慈悲により我らに管理の任された司教区及び修道院は、秩序ある修道生活、聖なる信仰生活の交わりのほかに、主の恵みにより学ぶことのできる人たちに対し、それぞれの人の能力に応じて教える努力を払わなければならない。…言葉の誤りは危険なものではあるが、考えの誤りの方がはるかに危険であることは、われわれ皆が良く知っている。そこであなたがたが学問研究を怠らないばかりでなく、いつそう容易に、また正しく神の書の神秘を洞察できるように、最も謙虚で神に嘉せられる意図を持ってしっかりと学ぶことを奨励する。聖書には詞姿、比喩あるいはそのほかのそれに類したものの挿入されているものが見られる。

それで、だれでもまず学問教育を十分に受けていればいるだけ、それらを読んでも早く霊的に理解できるようになることを疑い人はいない。…¹⁹」

カール大帝は教育を担う聖職者たちに対して、誤りのない民衆教化のためにも早急に学校を建設することを指示し、おそらく既に散見されていたであろう種々の誤りを正す必要性を説いている。これらの文書は当時のフランク王国の知的レベルのみならず社会情勢と彼の危機感までも映し出している。その彼が自らの宮廷学校に招聘したのは、アイルランドを起点として当時優れた学者を輩出していたイギリスの修道院出身の人物たちであった。

2) アルクイヌスとヴェーダ・ベネラヴィリス

カール大帝によってフランク王国に招聘され、この宮廷の知的活動に大いなる貢献をした人物は、何といてもアルクイヌスであろう。アルクイヌス（アルクイン）Alcuinus（730 頃 -804）はイギリス、ヨークの司教座聖堂付属学校で学び同校の教師、校長、図書館長を歴任した。782 年フランク王カール大帝の招聘により、彼の宮廷学校の校長に就任し、カロリング・ルネサンスと称されたその文化振興に貢献した。『文法学』Gramatica、『正書法』De orthographia、『修辭学と徳についての対話』Dialogus de rhetorica et virtutibus などの他、聖書註解書などの著述を残している²⁰。

彼の『文法学』は、生徒と先生による対話という形式をとっており、当時の教育の實際を想起する上でも興味深いものであるが、この中で述べられる学問、すなわち自由学芸に関するアルクイヌスの認識と教育の目的を見てとれることは一層関心を呼ぶ。いくつかの文章のみ抜粋・引用したい。書物は以下のように始まる。

「生徒：たいへん博学である先生、私たちは、哲学があらゆる徳の教師であり、哲学こそがこの世のすべての豊さのなかにあつて、その所有者を不幸にしない唯一のものだと先生が述べられていられるのを、たびたび耳にしました。…²¹」

そしてこの作品の中で生徒と教師の対話の形で知恵や学問の意義についてが語られるのであるが、最後に教師の言葉として、以下のような自由学芸七科への言及によってこの巻は結ばれている。

「教師：さればこそ、あなた方が探している段階がここにある。そして、あなた方が今これから見ようとしているのと同じくらいの激しい欲求がいつもあらんことを。その段階とは、文法学、修辭学、算術、幾何学、音楽、天文学である。…いとも親愛なる子供たちよ。さらに歳を加え、魂がさらに強い認識の力を持って聖書の頂点に達するようになるまで、若いあなた方は毎日、これらの小道具を使って駆け抜けて行かねばならない。このように武装した真の信仰の擁護者、真理の保護者として、あなた方は、どんなにしても負けを知らないものとなるのである²²。」

強大なフランクの支配者カール大帝が迎えたイギリスの高名な学者アルクイヌスにおいても、自由学芸をあまねく学ぶ事が、さらなる高みを目指すために必要不可欠であることがこのように表現されている。ヨーロッパの大学における基礎科目としての自由学芸は、

それよりはるか以前より、その存在の重要性を顕示しているのである。

カールの宮廷にこそ仕えなかったが、このアルクイヌスに連なるイギリスの修道院の学問研究を良く体現している先駆者、ベダ・ヴェネラビリス Beda Venerabilis (673/674-735) は、彼よりやや早い7世紀初めにイギリス、ノーザンブリアのアングロ＝サクソン王国に生まれた。ジャロウの修道院を創設したベネディクトゥス・ビスコップの指導下に学び、彼自身もジャロウの修道院で聖書註解など学問研究、教育、著作、祈りの生涯を送った、「ノーザンブリア修道院文化」を代表する一人である²³。著作に『イギリス教会史』*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*、『正書法について』*De orthographia*、『事物の本性について』*De natura rerum* などがある。

彼もまた修道院が宗教生活の場であると同時に学問研究と教育の中心地であった中世初期の様相を体現する人物であるが、その著作には現代の「中世観」を覆すかのような記述も見られる。例を挙げるならば、『事物の本性について』には、自然界に関する驚くべき解説が少なくない。この著作は主にローマのプリニウス Gaius Plinius Secundus (23 頃-79) の『博物誌』*Naturalis historia* やセビリャのイシドルスを典拠としているが、例えば以下のような章はどうであろうか。

「第 32 節 雲について (プリニウス)

雲は、上記の軽さで非常と海から水蒸気を高く上げた大気が、1 滴ずつ凝集して丸く集められたものである。…²⁴」

「第 46 節 地球が球に似ていること (プリニウス)

地球が丸いとわれわれが言うのは、山と平野に多くの凹凸があるため、完全な球形であるというわけではなく、地球をぐると取り囲む線の全体が全体として捉えられたなら、完全な円の形を取るということの故である。…²⁵」

これは、中世ヨーロッパにおいて古典古代の知識が思いのほか柔軟に受容されていた事実と、それを受け入れた中世の知識人の合理性・論理性の証左であると言えよう。何よりも、「古代」から「中世」を通して流れる水脈としての自由学芸をここでも確かに見出すことができるのである。

結語

ヨーロッパにおける「古典古代」は様々な時代において確認される要素である。とりわけ、14 世紀に先駆を見、15 世紀に開花する「ルネサンス」*renaissance* が「(古典古代の) 復興」を源としていることは周知の事実である。あるいは、ブルクハルトに代表される中世との対立概念としてのルネサンス観に反駁し、「カロリング・ルネサンス」、「十二世紀ルネサンス」の概念が登場して既に久しい。いずれにしても「古典古代」的要素が一度、文化・社会の中で中断し、何らかの理由により再興するという図式が一般化しているといえよう。

しかしこれまで見てきたように、古典古代的要素の象徴ともいえる「自由学芸」においては、多少断続的な側面があったにせよ、ヨーロッパの教育とそれを担った知識階級においては地下水脈のように常に存在し続けていたのではないか。ローマと新たな「ヨーロッパ」をつなぐ蝶番たるボエティウスやカッシオドルスに始まり、カロリング・ルネサンスやそのほか中世ヨーロッパの膨大な数の学者たちを経、大学の成立に至ってその教養課程として盤石の地位を確立するまで、古代ギリシア・ローマの自由学芸は、多少の時代差、地域差こそあれ、ほぼ常にヨーロッパの教育の場において重要な位置を占める領域であった。

「自由学芸」を、ギリシア・ローマ以来の基礎教養、かのカッシオドルスの言うように自由人に相応しい学問²⁶、すなわち自由人たる者—古代ギリシア・ローマ以来の一が身につけるべき基本的知識・技芸という意味を再認識するにおよんで、たとえ神学的教理に反する内容を含んでいてもこれを基礎教養として位置づけ、保持し続けた中世知識人たちの洞察力があつてこそ、近代ヨーロッパの躍進に至る知的蓄積が可能であつたということができまいか。

ルネサンスの人文主義 humanisme は、この古典古代から継承された学芸に改めて光を当て、さらなる未知—過去に舵を取った未知である—への探求に邁進した結果の思潮であつた、ということが可能かもしれない。

註

- 1 邦訳は、タキトゥス 泉井久之助訳注『ゲルマーニア』岩波文庫、1979年。
- 2 375年、前年のフン族の移動によるゲルマン人の大移動開始、以後ゲルマン諸民族の動きは以下の通り。395年、ローマ帝国がコンスタンティノープルを首都とする東ローマ帝国（ビザンティン帝国）と西ローマ帝国に分裂。410年、アラリック王配下の西ゴート族がローマ市を略奪、418年にトゥールーズを中心とするフランス南部からイベリア半島におよぶ王国を建設（—711/713）する。429年にはヴァンダル族が北アフリカに王国建設（—534）、449年 アングロ・サクソン人、ブリタニアに進出、七王国を築いて先住のケルト人を圧迫した。476年の西ローマ帝国滅亡の後の動きは次の通り。481年頃クローヴィスがフランク族の王となる。493年、東ゴート族テオドリック王、イタリア王国を建設し（—555）東ローマ皇帝によって承認される。568年、ロンゴバルト族が中・北部イタリアに王国建設（—774）。
- 3 Fouracre, P. ed., *The New Cambridge Medieval History I c.500-c.700*, Cambridge, 2005. p.147.
- 4 中世における自由学芸に関しては以下を参照。
E. ガレン 近藤恒一訳『ルネサンスの教育』池泉書院、2002年。（Garin E., *L'educazione in Europa*, Bari, 1957）
- 5 ボエティウス、特に生涯については以下の書籍を参照。
Merenbon, J., ed., *The Cambridge Companion to Boethius*, Cambridge, 2009. pp.13-22.
- 6 ボエティウスはこうした古典学芸関係の著作のほか、神学関連の作品も残している。
『三位一体論』De Trinitate; Quomodo Trinitas unus Deus ac non tres Dei, 『父・子・聖霊は神性に実体的に述語づけられるか』Utrum unus Pater et Filius et Spiritus Sanctus de divinitate substantialiter praedicentur, 『カトリックの信仰について』De fide catholica, 『エウテュケスとネストリウス駁論』Contra Eutychen et Nestorium 他。
- 7 カッシオドルスの教育の具体的内容については、以下の書籍を参照。

- 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』知泉書院、2007年。5ページ-52ページ。
- 8 本稿ではカッシオドルス『要綱』邦訳について以下から引用している。
編訳/監修 上智大学中世思想研究所/野町啓『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』平凡社、1993年。
- 9 同上、336-337ページ。
- 10 同上、339ページ。
- 11 ガレン、前掲書、35ページ。大教皇グレゴリウスは同じくローマ人司教であって、カトリック典礼改革やゲルマン人宣教に功績を残す。
- 12 古典古代期の自由学芸に関して本稿で詳述はできないが、このテーマに関しては以下の書籍を参照。
Marrou, H. I., *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris, 1948.
- 13 同上、349-350ページ。
- 14 キリスト教がローマ帝国に伝播して以来、国家によって公認・国教化される以前からすでに、キリスト教組織（キリスト教会。ローマ・カトリック教会）は非常によく構築された指導者（司教）と教区による行政的制度、また後には施療院・救貧院などの施設によって福祉的役割を果たす相互扶助制度を形作っていた。
- 15 中世初期の教育に関しては以下の書籍を参照。
Riche, P., *Ecoles et enseignement dans le Haut Moyen Age fin du Ve siècle-millieu XI^e siècle*, 3ed., Paris, 1999.
- 16 イシドルス（セビリャのイシドルス）はセビリャの司教を務めた西ゴート王国を代表する知識人。その代表作『語源』は様々な事象を合理的に解説・定義づけた20巻からなる百科全書的著作であるが、ここで彼は自由学芸七科についても解説している。（第1巻44章、第2巻31章、第3巻71章）
- 17 カール大帝の文教政策に関しては、ひき続いて引用するテキストの他、ガレン前掲書、35ページ-37ページを参照。
- 18 Riche, P., *Ecoles et enseignement dans le Haut Moyen Age fin du Ve siècle-millieu XI^e siècle*, 3ed., Paris, 1999. pp.352-353.
- 19 編訳/監修 上智大学中世思想研究所/大谷啓治『中世思想原典集成 6 カロリングルネサンス』平凡社、1992年。148-149ページ。
- 20 アルクイヌスの自由学芸観、教授法に関しては、岩村前掲書、137ページ-221ページを参照。
- 21 前掲書、122ページ。
- 22 同上、130ページ。
- 23 *ibid.*, pp.55-61.
- 24 同上、102ページ。
- 25 同上、108ページ。
- 26 「自由学芸」の語に関しては、複数の解釈が存在するが、カッシオドルスも「自由人に相応しい」という意味づけを行っている。ガレン、前掲書、42ページ。
他、ガレン、前掲書、20ページに中世知識人によるある解釈として「自由なる学問、即ち、自由人のための学問」という解釈が記載されている。

参考文献

- Fouracre, P. ed., *The New Cambridge Medieval History I c. 500-c.700*, Cambridge, 2005.
- Casiday a., Norris F. W., ed., *The Cambridge History of Chrietianity: Constantine to c. 600*, Cambridge, 2007.
- Noble T. F. X., Smith J. M. H., ed., *The Cambridge History of Chrietianity::Eary Wedeival Christianities c.600-c.1000*, Camblidge, 2008.
- Marrou, H. I., *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris, 1948.

Riche, P., *Ecoles et enseignement dans le Haut Moyen Age fin du V^e siècle-milieu XI^e siècle*, 3ed., Paris, 1999.

Garin E., *L'educazione in Europa*, Bari, 1957. (邦訳 E. ガレン 近藤恒一訳『ルネサンスの教育』池泉書院、2002 年。)

Merenbon, J., ed., *The Cambridge Companion to Boethius*, Cambridge, 2009.

上智大学中世思想研究所 / 野町啓『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』平凡社、1993 年

上智大学中世思想研究所 / 大谷啓治『中世思想原典集成 6 カロリングルネサンス』平凡社、1992 年